

トラック運送事業における「損益分岐点分析」の概要について・その1

前回は、「経営理念・その3」として、「経営理念の事例」を紹介致しました。今回からは2回に分けて、「目標利益」を達成するために必要な「売上高と費用（固定費＋変動費）」を明らかにする時に用いられる「損益分岐点分析」の概要について記してみたいと思います。

1. 「損益分岐点分析」の進め方について

(1) 損益分岐点について

自社のキャッシュフローを正確に把握し、目標利益を設定して、利益計画を立案するためのモノサシが「損益分岐点」です。損益分岐点とは、営業収入（売上高）と費用がバランスする点、つまり企業の損益が±0となる分岐点の売上高です。

売上高が分岐点を上回れば利益が生じ、反対に売上高が分岐点を下回れば損失が発生します。文字通り、黒字になるか赤字になるかの分岐点を表します。

「損益分岐点分析」を行うことは、売上高と費用の関係を明確にすることです。まず、自社の費用を「固定費と変動費」に分解（個変分解）することから始めます。

- 「固定費」とは、売上高の増減とは関係なく、一定額発生する費用です。
- 「変動費」とは、売上高の増減に比例して発生する費用です。

■「個変分解」の方法はいろいろありますが、一般的には簡便な「勘定科目法」が広く用いられています。

即ち、運送原価算出の項目（費目）別に「固定費」と「変動費」に分解し、両方に跨る場合は「固定費割合」と「変動費割合」に按分して、「個変分解」を行います。

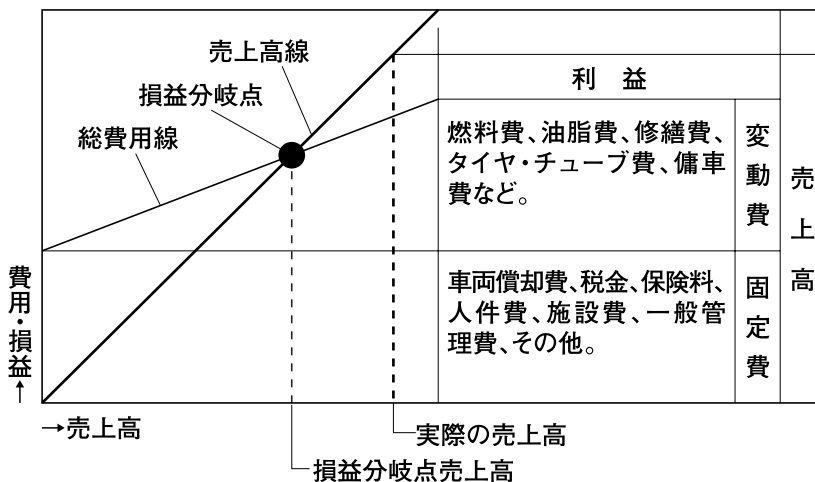
■損益分岐点分析を行う目的の一つは、売上高と費用の相関関係を理解することであり、自社の費用（コスト）を洗いざらい見直す必要があります。



(2) 損益分岐点図表の作成について

総費用を固定費と変動費に分けて表示し、売上高との関係を一目で判るようにした図表を「損益分岐点図表」と言います。

【損益分岐点図表】



◆図表は、縦軸に費用と損益、横軸に売上高を金額で表しています。売上高を示す線と総費用線（固定費＋変動費）で構成されています。

◆この売上高と費用の交点を損益分岐点と言い、売上高がこの点を超えていけば、利益が出ている状態となります。

◆図の例では、売上高が損益分岐点を上回っており、利益が確保できています。

(3) 損益分岐点売上高の算出について

損益分岐点売上高は、売上高とそれに係わる費用の内訳から次の算出式で求められます。

$$\text{損益分岐点売上高} = \frac{\text{固定費}}{1 - \frac{\text{変動費}}{\text{売上高}}}$$

- 売上高＝利益＋費用（固定費＋変動費）
- 固定費＝車両償却費＋車両の税金＋車両の保険料＋人件費＋施設費＋一般管理費＋その他
- 変動費＝燃料費＋油脂費＋修繕費＋タイヤ・チューブ費＋有料道路&フェリー利用料＋備車費＋その他

損益分岐点売上高の算出事例

<p>■月間営業業績</p> <p>売上高：1,000万円</p> <p>固定費：600万円</p> <p>変動費：300万円</p>	⇒	<p>■損益分岐点売上高の算出結果</p> $= \frac{600}{1 - \frac{300}{1,000}} = \frac{600}{0.7}$ <p>= 857万円</p>
---	---	--

尚、月間売上高1,000万円の時の費用は、固定費と変動費を合わせて900万円でしたが、売上高が857万円の時は、変動費もそれにつれて少なくなり、この時の変動費は257万円となります。従って、売上高857万円（損益分岐点）の時の費用の内訳は、固定費：600万円（売上高に関係なく一定）
変動費：257万円（売上高の増減に比例して変動）
の合計：857万円となり、損益は±0ということになります。

事例での損益分岐点売上高は、857万円になります。